

太宰府の文化財

151

絵馬「聖徳」「勝蘭結葉水月同照」

杉材

宝永元年（江戸時代）

雲外独歩筆

太宰府天満宮絵馬堂所在



▲縦173.5センチ 横294センチ



▲縦173センチ 横299センチ

写真は、太宰府天満宮の絵馬堂に掲げられている書の絵馬です。「聖徳」「勝蘭結葉水月同照」と書かれた文字は大変立派で、書家の技量を感じさせます。

書家は落款・印章から雲外独歩という人で、文道の神である天神様にこの2つの書を奉納する由が「勝蘭」の額の両側に記されています。

ところで、雲外独歩とはどんな人でしょう。独歩は杵屋五郎右衛門というのが本名で徐農とも称し、志摩郡谷村（現福岡市西区今宿谷）の人です。

雲外独歩は雅号で、絵馬でもわかるように、書の堪能な人でした。彼の能書を物語る逸話として「ある時、書を中国に送ったところ、清の人たちが大変感歎して、書の余白に諸大家の賛辞を添えて数年後に送り返してきた」という話が伝えられています。しかし書の道に熱心な余り、富家だった家も傾いてしまったと言われています。

このような独歩の書の先生は中国・明の黄檗僧独立性易でした。独立は江戸時代の初めに長崎に來日、後に宇治の万福寺を開き、禅宗の一派、黄檗宗の祖となる隠元に参禅して得度し、隠元の書記となった人です。

寛文5年（1665）には豊前小倉の福聚寺の書記として招かれ、寛文12年亡くなりました。独立は書に優れ、詩や文もうまく、また医療にも通じていたということです。独歩は独立が長崎に居た時か、小倉時代に弟子になったのでしょうか。

さて、絵馬の背面に残る墨書から、この額は雲外の書を福岡の仏師、佐田氏が彫刻し制作したことがわかります。ただ、佐田の誰かは墨が消えて読めないのですが、時期としては佐田又四郎朝通、弟の源兵衛万通が活躍していたころです。

300年の風雪を越えて2つの絵馬はいろいろなことを語ってくれます。

この広報紙は、地球環境の保全のため再生紙を使用しています。

太宰府の文化財

152

涅槃図

紙本彩色 掛幅装
大きさ
縦180・5センチ
横158・2センチ

江戸時代(天和3年)

戒壇院蔵



2月15日に亡くなった釈迦を偲ぶ法会・涅槃会に下げられる釈迦入滅の情景を描いた図が涅槃図です。

東西南北各1対の沙羅双樹の下に横たわる釈迦、その周りで、嘆き悲しむ仏弟子・菩薩・諸王・動物たち、天上より駆けつける摩耶夫人(釈迦の母)などが描かれています。

戒壇院のこの図は「什物縁起目録次第」(「東長寺文書」)によると、天和3年(1683)に久野道立が寄付したと記されています。久野道立は、延宝8年(1680)には戒壇院のお堂再建にも力を貸している人です。

その後も、この涅槃図は表装が破損して修理が必要になる度に久野家が、家祖道立が寄進した涅槃像ということで、修理の費用を受け持っています。これを納めた箱の蓋裏には、これらの事情と安永3年(1774)と文政7年(1824)2度の修理の記録が墨書されています。

ところで涅槃図は人々の表情も変化にとんでいます。ムカデから象までさまざまに描かれた鳥獣たちは図鑑を見ているようです。

梵鐘

新春のお慶びを申し上げます。日本経済は混迷を窮めているが、春、樹の芽が冬中被っていた殻を破って出てくるように、やがて英知による再始動に期待したい。

本市も今、長年の悲願であった九州国立博物館の誘致を機に、博物館を核としたまちづくりを目指し模索している。

市民意識調査では、市民の75%が博物館に関心を持ち、68%が建設を歓迎しているものの、9%が交通混雑などを理由に迷惑と考えている。

市民を中心とし、行政と一体となったまちづくりが必要である。「活力のあるまちの創造に向けて」市民独自の委員会組織も発足し、「大規模な駐車場とバス輸送」、「史跡地のネットワークの整備」など構想の輪が広がっている。

何かを成し遂げようとするならば、粘り強い執着と執念、思い立ったときの純粹さを失うまい。

(井)

この広報紙は、地球環境の保全のため再生紙を使用しています。

太宰府の文化財

153

宗七焼香炉 一基 陶製

高さ 28・9センチ
最大径 28・0センチ
観世音寺蔵



▲底にある「宗七」の印



▲3種の透かし彫りのある蓋

香炉は香草を焚き、悪臭を消すために使う器具ですが、仏教では仏様への供養の一つとして仏前で香を焚くためにも香炉が作られました。

この香炉も地藏菩薩を表す梵字が3種透かし彫りにされており、お地藏様供養のために注文して作られたものであろうと考えられています。

材質は焼き物で、地肌は柚の肌似た風合、身の両端には鬼面の鏝付が付き、胴回りにはラーメン井についている模様と同じ雷文つなぎ文が、その上には龍をデザインした文様が刻まれています。

底には「宗七」の印があり、この香炉は宗七焼であることが分かります。

さて、宗七焼とは、江戸時代、福岡城を築くに当って播州から下って来た瓦師正木仁右衛門の曾孫、宗七によって始められました。彼は黒田公に素焼製品の制作を命ぜられ、火鉢などの日常の実用品を中心に作っていましたが、二代

目宗七は代々の秘伝となる柚肌錆地焼を考案し、宗七焼の基礎を築きました。また、藩の許可を得て「御用御焼物師」の看板を掲げました。

三代目は名を豎茂といい、歴代宗七の中で一番の名工と伝えられ、茶事用の風炉、手あぶり火鉢である手炉、香炉、火鉢、七厘などの外に、置物、文鎮、能面、人形等の美術品も作り、遠くまでその名が聞こえたということです。

この香炉も三代宗七の作と考えられています。印の右肩に「イ」字が刻まれているので、三代四代に任せ、作品も制作したといわれる手代の伊作がこの香炉にも深く関係したのではないかと想像されます。

三代宗七豎茂の現存作品ではほかに博多善導寺の大香炉（以前、九州歴史資料館に展示されていた）が有名です。市内では戒壇院と光明寺に三代と四代宗七作の達磨像がありますので、次回お話ししたいと思います。

この広報紙は、地球環境の保全のため再生紙を使用しています。



②像高43.8センチ 文政4年
四代宗七幸弘作 光明寺蔵



①像高43.8センチ 天明6年
三代宗七堅茂作 戒壇院蔵

太宰府の文化財 154

宗七焼達磨像 陶製

前回に続いて宗七焼についてです。

市内の禅寺に二つの宗七焼の達磨像が伝わっています。

一つは戒壇院にあるもの(写真①)で、前回の香炉と同じ三代目の宗七作です。中を見ると、前と後、二つに分けて取った型を合わせ、継ぎ目は丁寧につぶし、黒くいぶし焼にしています。そしてその上に白い胡粉を塗って下地を整え、色を付けています。

赤い衣を着て大きく見開いた眼、細かく丹念に描かれた眉毛や髭、胸毛などは専門の画工の手によるものかとも言われています。

体内に銘書された銘文によると、この像は戒壇院の祖師堂安置のお像として、天明6年(1786)閏10月5日横岳崇福寺の徳隠薩和尚が寄進したものであることが分かります。

もう一体は光明寺に祀られている像(写真②)で、次の四代目宗七が作っています。

同じ達磨大師像でも、随分雰囲気の違い、この像は一人の人間としての達磨を表現しているように感じられます。作りは底を張っているのですが、内側が覗けません、これも型抜きではないかと考えられます。

背面には、文政4年(1821)3月25日、光明寺の住持仙巖知鈞和尚の代に宗七正木幸弘によって作られたという銘と印が刻まれています。

達磨はペルシャあるいはインドの人で、6世紀の初め中国に來た僧です。そして禅宗が盛んになるに従い、壁に向って9年間座禅をして悟りを開いたという話が生まれ、禅宗の祖として、その像が絵や彫刻に作られていきます。この二像も、禅宗では大切な祖師像として注文、作製されたのではないのでしょうか。

このように陶製の人形を作り、博多人形の祖の一つともいわれる宗七焼は明治の初め、6代で途絶えてしまっています。

この広報紙は、地球環境の保全のため再生紙を使用しています。

太宰府の文化財

155

石造地藏菩薩立像

砂岩製

像高 126.2センチ

江戸時代

戒壇院所在

私たちに一番身近な仏様というとお地藏様ではないでしょうか。でも最近では路傍に佇むお地藏さんを見ることも少なくなりました。

以前も書きましたが、お地藏さんはお釈迦様が亡くなって弥勒仏が出現するまでの56億7000万年の無仏の時代、六道の衆生を救済し、特に地獄で苦しむ人々を助ける慈悲深い仏様として信仰が広がりました。江戸時代には延命地藏や子育て地藏などの身代わり

地藏が民衆によって数生み出され、ますます親しみやすい仏様になっていきます。

戒壇院にあるこのお地藏様も、江戸時代に彫られています。砂岩製なので、剥離しているところもありますが、左手に宝珠をのせ、右手で錫杖を持って蓮華座の上に立つ姿は穏やかです。正面の蓮弁には文字が彫られていて、それによると、このお地藏様は元禄11年(1698)の運照律師が

住職のときに造られたことが分かります。ちょうど今年で300年になりますね。

さて、運照律師はこの欄でも何度か出てきましたが、戒壇院の江戸時代初めの復興時に、本尊の光背や、二つの脇侍、鑑真像などを造立して、お寺を整えるのに活躍した人です。このお地藏様は、現在はお堂に納まっていますが、記録によると、天明のころ(1780年代)は、今は礎石しか残っていない山門の階下に安置されていたようです。

さて、この文化財シリーズ

は、国や県、市が文化財として指定しているか否かには関係なく、先人が残した素晴らしい文化を市民の皆さんに知っていただくとともに、後の世にきちんと残し伝えていきたいという思いで書いているものです。ただその多くは、いわゆる神社やお寺という信仰の場、そして信仰の対象となっている仏像などで、それらは文化財という、物としてとらえられないという面もあります。それなのにあえて文化財という枠で囲ってしまうのは大変心苦

しいのですが、お許しいただくとともに、読者の皆さんにもその点を心に留めて、対象に接していただきたいと願っています。



写真提供：九州歴史資料館



▲台座仰蓮弁陰刻

太宰府の文化財

156

水城の木樋

西暦664年
水城跡

水城は「日本書紀」に「大堤を築きて水を貯えしむ。名づけて水城といふ」と記され、現在、「大堤」つまり土塁が平野を横切る丘のように続いています。土塁は土を積み重ねて築いていますが、その下には「木樋」と呼ばれる暗渠の

木製の水路も何カ所か通っています。太宰府では旧国道3号線の側で、昭和5年（昭和50年再調査）に、平成2年と今年にはJR水城駅近くで、3カ所で確認されています。ほかに江戸時代には、元禄時代と文政のころに「大いなる

木」が土中から掘り出されたことが記録されており、これらを考え合わせると、木樋は少なくとも数カ所設置されていたのではと推定されています。

水城駅そばの木樋は下に敷

かれた枕木などだけが残り、木樋本体は抜き取られて見ることができませんでしたが、旧3号線そばでは、本体（写真①）が出てきました。暗渠の水路なので側板も蓋もあるのですが、ほとんど腐つていて、きれいに残っていたのは

立派な底板で、2枚をかみ合わせて、内法幅1・2m、高さ80cmの

水路を作っていたことが分かりました。板の厚さは元禄時代に出土した木樋の部材と言われ、観世音寺に伝わる板材（写真②）の寸法、長さ3・3m、幅73cm、厚さ26cmが参考になると思います。

その木樋が最近、また春日市で見つかり話題になっています。春日市にも谷部を遮断するために太宰府の水城を小型にしたいわゆる「小水城」と呼ばれる土塁が残り、その一つ上白水にある大土居水城の調査で、写真③の木樋が出土したのです。

残念ながら側板の上部と蓋はありませんでしたが、幅60

cm、厚さ20cm以上、長さ7m近い底板と少し小型の下部側板はきれいに残っていました。水路の幅は太宰府出土の木樋の半分で、土塁底辺の幅も約40mと80mという規模から見た小水城と水城大堤との関係に符合するようで興味深いものがあります。

さて木樋は何のために作られたのでしょうか。

一つは土塁の外側（海側）にあった濠に水を溜めるため、内側（太宰府側）で集めた水を濠へ流す導水管の役目を果たしていたというもの。

もう一つは、大土居の調査で暗示的に出土したのですが、木樋の上部に江戸時代ごろ作られた水路が重なっており、濠へ水を溜めるためばかりでなく、内側から外への用水施設、水道確保の役割も担っていたのではと推測されています。

しばしば感心することですが、昔の人たちの土木技術として知恵をまた木樋を通して見ることができます。



① 太宰府で出土した木樋（写真提供：九州歴史資料館）



② 観世音寺に伝わる木樋の板材（現在、九州歴史資料館に展示）



③ 春日市で出土した木樋（写真提供：春日市教育委員会）

この広報紙は、地球環境保全のため再生紙を使用しています。

太宰府の文化財

157

旧石器

1万9000年前ごろ
大佐野脇道遺跡出土

1万年前とか2万年前とか言われても、なんだかピンと来ませんが、旧人ネアンデルタール人が出現するのが15万年前、現人類の祖先となる新人クロマニヨン人などは約4万〜3万年前に出現しました。日本でもそのころ人間が暮らしていた証になる石器や食べた動物の骨が出てきます。太宰府では1万9000年前ご

◀スクレイパー（黒曜石）



◀台形石器（水晶）



ろの石器が大佐野の県立福岡農業高校の近くで出土しました。

1万9000年前とはどんな時代だったのでしょうか。気候は氷期の極寒冷期（年平均気温6度前後）現在の年平均均（13度）が少しゆるみつつあるところで、西日本一帯は針葉樹と広葉樹の混合林におおわれ、チョウセンゴヨウ、ハ

シバミ、クルミ、クリ、キイチゴなどの実が食料として利用されたのではないかといわれています。動物は、氷期で海面が下がり陸続きになった日本海を通り、大陸からナウマンゾウやオオツノジカ、原牛などが渡って来ていました。それらを狩猟する一方、サケやマスなどの川をさかのぼる魚を追って広い地域を移動する暮らしをしたと考えられています。

さて、大佐野に残された石器は数十点がはつきりした形のもので、残りの1000点以上は大小の剥片でした。石器の用途は今の段階では良く分かっていませんが、動物の肉や皮を剥ぐ、皮から脂肪を掻き取る、皮をなめす、骨や角・草木を切る・削るなどの道具かと言われるスクレイパーや台形石器、槍先に取り付けたのか先を尖らした尖頭器（石核）などもありました。石器の材質は安山岩（サヌ



▲剥片尖頭器（安山岩）



▲石核（安山岩）

カイト）、黒曜石がほとんどで珍しいのは水晶製の台形石器です。黒曜石は産地が分かる石もあり、長崎県の九十九島と佐世保近くの針尾島産などでした。安山岩は九州では佐賀県多久が知られていますが、大佐野出土の石器ではまだ詳しい選別がされていません。

大佐野の石器群は住居や集落跡から見つかったものではなく、近くからか流されて来たものです。近くどこかに住居跡があるかもしれませんが、旧石器時代は前述のように、どうも一定の場所に長く住まなかつたらしく、次の縄文時代以後のような住居跡はなかなか見つからないということ

です。

もう一つこの遺跡では2万4000年前に噴火した始良カルデラの火山灰層も確認されました。始良カルデラとは鹿児島湾北部にある火山で（今の桜島はその南縁に出来た中央火口丘）それが巨大噴火し、日本列島のほぼ全域に灰が積りました。気候変動や環境に大きな影響を与えたとと思われる始良カルデラの大噴火の灰は、今では遺跡の年代を決める確かな指標になっています。前述の石器類はこの層の上から出てきました。

大佐野に足跡を残した人々の遺伝子は今も誰かの中で生き続けているかもしれません。

この広報紙は、地球環境保全のため再生紙を使用しています。

経筒 1

今までもこの欄で何度か取り上げたことがある経筒ですが、今回と次回と太宰府天満宮所蔵の経筒を中心に、未紹介のものを紹介していきます。さてお釈迦様の入滅後、仏の教えがなお残って、教（教説）・行（その実践）・証（その結果）が共に備わった正法の時代から次に、教と行のみの像法時代を経て、教のみの末法の時代になり、ついには仏教が減んでしまうという末法思想に伴って、末法の世に経典を保存するために容器にお経を入れて地中に埋めました。その容器のことを経筒といいます。



① 長治三年銘の銅製経筒

（県指定文化財）
 総高 30・6 cm □径 9・2 cm
 平安時代 太宰府天満宮蔵

写真①の経筒は坂本の善正寺跡といわれる場所出土したと伝えられるものです。材質は銅の铸件で、筒身の中央と上端・下端に節が巡っています。蓋は反り上がり美しい六角形の縁と中央に擬宝珠のつまみがついた形をしています。そして、この経筒には次のような文字が刻まれています。願以此功德 普及於一切

我等与衆生 皆共成佛道

長治三年 願主僧

慶源奉供養 四王寺飯森

長治3年（1106）は平安時代の後期で、この後20年くらいの間が九州の経塚造営の最盛期に当たります。願主の僧慶源のことは分かりませんが、四王寺飯森と記されているので、四王寺にいたお坊さんかも知れません。出土地と伝えられる善正寺

も江戸時代の『筑前国統風土記』には四王寺の座主がいた寺だと書かれていて、いずれ

にしても四王寺山にあった四王寺と何か関係があったと考えられる経筒です。

② 四耳付長胴壺

総高 26・9 cm □径 6・2 cm
 南宋時代 太宰府天満宮蔵

字八幡出土と伝えられる経筒です。字八幡は現在の太宰府中学校が建つ辺りです。

あれば経筒に転用されたものであろうと考えられています。

この壺自体は本来、経筒用に作られたものではなく、茶壺やザイサイを入れる壺として作られたものが、言い伝えどおりで

この壺が焼かれたのは、南宋時代の中国、日本では平安時代の後期にあたる時代で、肩に4カ所の突起つまり耳が付いているので四耳壺と呼ばれます。



この広報紙は、地球環境保全のため再生紙を使用しています。

太宰府の文化財

159

経筒 ②

写真①の経筒は横岳上方の四王寺山腹で道路工事のため斜面を削ったときに見つ

りました。埋まっていた状態は後述②の経筒によく似ていたということですが。

この経筒は中国の浙江省あたりで作られた陶器で褐色の釉がかかっています。底には「莊綱」の墨書きがあり、これは、「綱首・莊某」という意味です。綱首というのは船団を持って貿易活動をしている宋人の貿易商人のことで、平安時代末期、博多にはいく人も宋人綱首が活動していたこ

とが最近の発掘や調査で分かっています。墨書銘から想像するに、この経筒も綱首として日本と宋の間の貿易に従事した莊某が埋納したか、深く関わったものと考えられるのではないのでしょうか。

写真②は観世音寺裏の四王寺山腹から出土したものです。これも中国で作られた陶器と

考えられ、白化粧土の上に黄緑色の釉がかかっています。

この経筒は、これとほとんど同じ形の経筒もう一本と一緒に埋められていました。二本は土にそのまま埋められていたのではなく、きちんと部屋を作って納めてありました。部屋は、地面を掘り、排水のために底には川原石を敷き詰め、四方の壁は自然の平石を積み上げて、その中に経筒を置き、周囲は防湿のための木炭をぎっしりと詰め込んで、大きな平石で蓋をして、その上にまた川原石を積んで土を

② 陶製経筒

総高 36・5 cm □径 6・5 cm
平安時代 九州歴史資料館蔵



写真提供：九州歴史資料館

かぶせた構造だったということです。

写真の経筒にはありませんでしたが、もう一本の経筒には底に「天永元」の文字が墨で書かれていました。「天永元」は年号で、平安時代末期の1110年に当たります。これによって、これらの経筒が作られた時期や、経塚が営まれた年代が推測でき、とても貴重なものです。

さて、太宰府から出土した経筒について何度かこの欄で

取り上げてきましたが、太宰府は全国的に見ても経塚が多く、たくさんある経筒が出土している所です。その中でも特に四王寺山周辺から多く見つかっています。そしてこれらの経筒はその近くにあった寺院と深い関わり、つまり寺院が中心になって寺域の近くに経塚を作るといった形が中心だったのでないかと言われています。

経筒を通して時代の信仰や文化そして経済などを見ることが出来ます。

① 莊綱銘の陶製経筒

(県指定文化財)

総高 35・7 cm □径 7・8 cm
平安時代 太宰府天満宮蔵



写真提供：太宰府天満宮

銅鏡 二面

江戸時代 竈門神社蔵



▲「宝満宮」鏡 (写真提供：九州歴史資料館)

① 「宝満宮」鏡

径54・7cm

竈門神社には祀られている3人の神像を現す3面の銅鏡があります。写真①はその一つ、玉依姫を現す宝満宮銘の鏡です。これは嘉永6年(1853)に再造されたものですが、もとの鏡はほかの2神を現す鏡と一緒に2代目藩主黒田忠之が寛永18年(1644)3月に寄進したものでした。それが嘉永6年に火災に

遭い、すぐに時の11代藩主黒田斉博によって造り直されたという訳です。

中央には宝満宮の本地仏である十一面観音を現す梵字キヤが陽鑄され、その下には寛永18年の時の座主平石坊幸重の名が記されています。

そして柄の部分にはこれを鑄造した深見藤右エ門満直の名が刻まれています。深見は博多の鑄物師の一統と思われるますが、満直のことはよく分かりません。時代的には深見彦三郎興定が活動していた時

期に当たりますが、両者が同一人物だったかどうかは不明です。

ところで忠之が寄進したほかの2面「聖母宮」「八幡宮」の鏡は嘉永年に罹災せず、寛永18年製のものが現存し、福岡県指定の文化財になっています。「太宰府の文化財67」平成2年12月1日号参照

忠之は歴代藩主の中でも信仰心の篤い人で、所領の寄進や再建、修復など神社や寺を保護する政策を進めました。竈門神社の3面の鏡も、その



▲「キリーク」鏡 (写真提供：九州歴史資料館)

② 「キリーク」鏡

径36・2cm

信仰心の表れだったのでないでしょうか。

寛文12年(1672)11月に第3代藩主黒田光之が寄進した鏡です。中央には阿弥陀如来を現す梵字キリークと、座主平石坊弘有の文字が鑄出されています。阿弥陀如来は八幡宮の本地仏です。弘有は幸重の次に座主になった人で、江戸時代の宝満山の復興に手腕を発揮しました。

さて①の鏡に残る銘文によると、黒田光之も3面の鏡を奉納したとあることから、この鏡がその一つと考えられます。光之も忠之のあとを継いで、寺社を保護しました。

これらは宝満山の江戸時代の復興と黒田公の関係を垣間見ることが出来る神鏡です。なお、銘文が鑄出されている面は鏡の裏側で、表はピカツとしています。

この広報紙は、地球環境保全のため再生紙を使用しています。